



遊動亭円木
辻原登

文藝春秋

遊動亭田

江苏工业学院图书馆
藏书章

登



文藝春秋

辻原登 一九四五年和歌山県生まれ。大阪学芸大学付属高校卒業。八五年「犬かけて」で作家デビュー。九〇年「村の名前」で第一〇三回芥川賞を受賞。九九年「翔べ麒麟」で第五〇回読売文学賞受賞。著書に「だれのものでもない悲しみ」「黒髪」などがある。

遊動亭円木

平成十一年十月二十日 第一刷

著者 辻原登

発行者 和田宏

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二二三
電話代表(〇三)三三六五―二二二

印刷所 大日本印刷

製本所 矢嶋製本

定価はカバーに表示してあります
万一落し乱丁の場合は送料当社負担でお取
替え致します。小社営業部宛お送り下さい

© Noboru Tsujihara 1999 Printed in Japan

ISBN4-16-318730-8

¥1714

遊動亭内木
目次

遊動亭円木 7

大切な雰囲気 30

短夜の雨 56

夜が安莉^{あんり}に駆けこむ 81

探偵 109

金魚

140

強きうなじ

167

笑いの郷

194

足にさわった女

224

べけんや

256

裝幀
南伸坊

遊動亭円木

遊動亭 円木

遊動亭 円木

円木えんぎにおもいがけない、むかしのひいき筋から大相撲の招待券が送られてきた。どこでどうやっていまの住所がわかったのか。先に電話までくれて、

「円木さん、なつかしい。わずらいの話はききました。でもくじけちゃいけません。あたしもようやつと債鬼のやつらをみんな死刑にして、かまえはうんと小さいが、一から出直す力が出たところ。あんたが船堀くんだりに逼塞してる、いや、ごめんよ、逼塞なんて――、それで船堀にいるときいてね。あんたに、むかしほら、一度は行ってみたいといってた大相撲の枀席をさ、あんばいしたからさ。いえ、あたしゃ行かない。円木さん、ひと枀、あんたの好きなように使ってくださいな」

明楽めいらくの旦那は先々代よりの白鳥橋のたもとの不動産屋で、バブルのとき銀行筋から強引にすすめられ、借りて買いまくった土地が、バブルがはじけてたちゆかなくなった。こわいお兄さんの取り立て屋に監禁されるなんて一度や二度のことではなかった。

円木は二つ目だったが、真打ちもそのうちというところで、不養生がたたり、遺伝体質の糖尿病が悪化して、白内障がすすみ、すっかり水晶体が濁ってしまった。もともと克己とか節制なんぞは大きらいなたちときてるからもういけない。一度なんぞは昏睡に陥った。下半身のほうもからきしくじがなくなった。目のほうも大病院で手術は手遅れといわれた。毎週一回、御茶の水までインスリンの注射をうけにゆく。

むかし、片目の噺家はいた。例の歌笑純情歌集や綴方教室で一世を風靡した三遊亭歌笑のことがある。二つ目になっても、まだ高座で先の曲芸師に、

「いまアンマを呼びますから、オイ、アンマ、笛を取っておくれ」

なんてからかわれていたそう。その歌笑、三十三歳で、昭和通りを渡ろうとして、進駐軍のジープにはねられて死んだ。みえない目のほうからジープは走ってきた。

歌笑が高座にあらると、客は笑うよりまずびっくりしたそう。片目でさえこうなのに、両目きかない噺家が笑いのとれるはずがない。二つ目が両目きかないなんて悪い冗談だ。

明楽の旦那にはずいぶんお世話になった。門前仲町の理髪店の娘を世話してくれようとしたが、円木はのんだくれて、見合いの席をすっぱかした。明楽の旦那は怒らない。

その明楽の旦那がおちぶれて、ふつり消息のとだえたところに、円木の両目はまるであおみどろの池に沈んだぐあいになった。客の顔もキャバレーの女給の顔も、ぼんやりというよりどろんと濁った中にうごめくかげのようにしかみえない。何度寄席をすっぱかしたかしのれない。とうとう師匠から引導を渡された。

妹とそのつれあいがやっている小松川の賃貸マンションの一室にころがりこんだ。妹もつれあひもやさしい心根をしている。よくできた男だ。あの世では、あいつらは善人でした、と証人になってやろうとおもっている。だまっていちばん日当りのいい2DKを、すでに入居のきまっていた客をキャンセルしてまで田木にあてがってくれた。目が不自由でも、日当りのいい部屋というものはありがたいものだ。家賃はいらない。日当りのいい部屋で、田木は日が一日、すわって、じっと自分の奥底を覗いて過ごす。

明樂のなんなは田木の目がこれほどとはつゆ知らず、糖尿っけが出て臨時にひっこんでいるくらいにおもっているらしい。十年だか十五年だかのむかしに、おまえさん、真打ちになったらまずどんなぜいたくがしてみたい、ときくから、ひとつ大相撲を枱席で、やぐら太鼓の鳴りはじめる朝から結びまで、芸者をそばにはべらせてじっくりとみてみてえ、とだんなのおごりの向島の席で一再ならずしゃべったのを、おぼえていてくれて、こうして枱席のチケットを送ってくれた。田木は、元氣になった明樂のなんなをひと目みたいとおもった。

この目はもう相撲をみることができない。しかし、田木の心は子供のようにはずんだ。一九九七年夏場所三日目の枱席Aのチケットだ。

「東小松川といやあ、なにかい、船堀街道を葛西かさいのほうから北へ新小岩のほうへのぼった左つかわあたりだろ？ ああへんにや寺が多いだろ？ 善照寺、正徳寺、宝積院、永福寺、寿光院、源法寺……、おぼえてるとも。宝積院には大銀杏がある。なに、いまでもある。そうかい、そりゃうれしいね。三月十日の大空襲のとき、そのへんくんだりまで逃げて、荒川の土堤っぺり

で二年くらした。金魚池があつたなあ」

いまでもありますよ、と円木は急に声はずんだ。大きな金魚の養殖池は一之江、二之江、春江あたりにかたまっているが、東小松川二丁目に、ぽつんととり残されたようにわびしげな池がひとつある。

明楽のなんにはそれ以上、その金魚池にも寺にもとりたてて思い出はないようで、その話はそれきりになって、三年ぶりの明楽のなんな声は切れた。

円木はまず妹夫婦に声をかけてみた。ところが二人ともその日はさわりがあるらしい。妹の声にかすかに、その目で相撲がみえるの、という色合いがこもった。あざけりの色か。悪気があつたんじゃない。だれにだつてそれくらい底意はある。底意がなければ人間じゃない。地を這う虫だ、空とぶ鳥だ、池を泳ぐ金魚だ。だから、虫や鳥や金魚がうらやましいというのだ。こうやって四六時中どろんとした視界を抱えて、自分のほうばかりみつめていると、この底意というやつがよくみえてこまる。ああ、こいつが人間てやつなんだ。底意が魚みたいに泳いでらあ。

ボタン・コートというのがマンシヨンの名前だ。服のボタンじゃなくて、牡丹と書くボタン。妹のつれあいが牡丹の花が趣味で、一階のエントランス脇や中庭パティオと屋上に、あわせて百二十株の牡丹を植えている。

いったいどうなつてのかしら。このごろめつきり牡丹がはやらなくなったの。東京中のどの本屋の花卉園芸コーナーにも牡丹の本は一冊もないのよ。保育社のカラーブックスにむかし、

『ボタン・シャクヤク』が入っていたのに、ずいぶん昔に絶版になったぎり。バラと洋ランしか花じゃないといわんばかりの近ごろの風潮がなげかわしいわ。

妹は、つれあいのうけうりで円木にそうためいきついて、なげいてみせる。なんだかチェーホフの「かわいい女」のオーレンカをほうふつさせる。

ボタン・コートは五階建鉄筋コンクリート造りで、全部で四十三室ある。そのうち三つの部屋で水槽に金魚を飼っている。一階西向き一〇一号室の山下、二階東向き二〇五号室の堀、それと三階東南角・三〇五号室の陳だ。

みんな女の同居人がいるが、それぞれにわけありで、三人ともドアの上にも横にも表札を出してない。郵便はすべて大家方にして、中庭を挟んだ別棟の三階建に住む円木の妹夫婦のポストに入れてもらっている。

山下、堀、陳の男三人は、大相撲はテレビでしか観戦したことがない。それをほんものが、しかも本場所でおがめるとあってありがたがった。しかし、柗席Aときいて二の足をふむ。

「なにをおっしゃる！ とびきり上等の向正面じゃないですか。あんたがた、一生かかってもかないっこない席ですぜ」

「そこがさね、さわりがあるところなんだよ」

「なんですって？」

「向正面柗席Aとなれば、テレビに映るんでしょう、ばっちり」と

「ぼくたち、それぞれすねにきずある身だからなあ」

「私のこれはでんな……」

陳が左小指をたてて、

「在留資格、切れてまんねん」

「でも、陳さん、それは王さんのほうで、彼女がテレビに映るわけないんですから」

「へえ。どないですやろな。なんやしらんが、居ごち悪うないですか。上手の手から水、いますやろ」

男たちが四の五のいつているのが、女たちの一喝できまってしまった。

「なにいつてんのよ。円木さんのいうとおりよ。あんたらみたいな甲斐性なしに、もう二度と本場所を枱席でなんてないことよ。ね、ね、あたしのかわりに寺尾の背中、たたいてきて」

こうして、円木一行はめでたく大相撲夏場所三日目に繰り出すことになった。このとき、だれひとり、円木の目のことを思い出さなかったのはふしぎだ。

円木が金魚池に出くわしたのは、去年の春の夜のことだ。『居残り佐平次』をぶつぶつ念仏みたいにとえながら幸泉湯へ出かけた。部屋にはユニットバスがあり、シャワーもついている。しかし、円木は銭湯がいい。さいわい杖ついた足でも、十五分とかからないところに幸泉湯はあった。

その帰り、やつぱり『居残り佐平次』の、

「ひどいやつがいるもんで、ものに動じないやつで……、お湯からあがる……。ああ、いいお

風呂だった……」

のくだりで、いつもは左に曲るところをひよいと右に折れてそのまま進む。むかし師匠が『居残り佐平次』をやったところ、こんな話をまくらにふったのを思い出した。

「あたくしなんぞはもう廓^{くわがはし}のほんとうの味は出せません。むかし、廓にかけちゃ神技、といわれたのが初代小せんさんで、わたくしが本日、ただいまお耳よごしをする前になんですが、この小せんさんの佐平次をお客さんにおきかせしたかった。そりやもう……」

小せんさんは吉原通いの度が過ぎて二十七歳で腰が抜け、三十歳で失明、三十七歳で遊女あがりの女房にみとられながら死にましたが……。さて、品川^{しんがわ}の海といいますが……」

初代小せんは盲^{もろ}だった。円木、おまえさんだって、からだなおして、その気になりやできないことは……、と師匠からいわれたが、あたしはそんな器^{うつわ}じゃござんせん、としつぽを巻いた。そんな、もう何べん思ひ出したかしのことがまたぞろ浮かんで、街灯のあかりだけがぼうつとにじんでいるだけの道をぶらりぶらりと行くと、すうつとまっすぐ水のおいが立った。水はすぐそこだ。まだ土堤についてもいないのだから荒川のはずはない。円木は下駄をつっかけている。カラン、と小石を蹴とばしてみる。すると、すぐそばで水に落ちる音がした。池だな、とわかった。

「おい、石を投げるな」

と声があがった。

「投げやしない。つまりて、拍子にとびこんだんだ」

「わかった。とにかく静かにしてくれ」

田木は首をかしげて耳をすませた。

「なにやってんですか？」

「みりゃわかるだろう。釣ってる」

「ほう、夜釣りですかい。何が釣れます？」

「金魚だ」

「金魚って、すくうもんじゃなかったんですか。釣るのなんてめずらしいや」

「めずらしいかない」

「何で釣るんです？」

「めしつぶだ」

「釣れますか？」

「釣れない」

「なぜ釣ってるんです？」

「釣るのにわけがいろいろかい」

「つれないことをいうねえ」

「なにがおかしい？」

「どこもおかしきもおかしいや。よく来るんですかい？ そんなことしてみつかったらしかられるでしょ」